

# 教務だより

2016年12月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 心を決めて受験に臨もう！

茗溪塾塾長 宇野雅春

駅の階段を降りようとしていた時のこと、高校生の集団が私を追い抜いていきました。その中の女子高生が、発した言葉…「てめえ、ぶっ殺されんなよ。言ってることわかってるんか！それで済むと思うなよ！」…決して怒っているわけではなく友達とじゃれあっているような印象なのだけれど、言葉には力があって迫力満点です。

この数年で、日本語が大きく変わってきていると思います。今年の流行語大賞にも「保育園落ちた、日本死ね！」が入っていますが、「死ね！」という言葉の重さが、昔とは違うという気がします。今でも学校の先生が、生徒に向かって「死ね！」と言ったら大問題になるのに生徒は、先生に「死ねよ！」とか「死ね！」は割と軽い気持ちで使っています。

「キモ！」とか、「キモイ！」もいじめ用語ですが、「キモかわいい！」というニュアンスもあって、より頻繁に聞きます。国会でもいったことでの「もめごと」…あやまれ！謝らない！…も多い印象…。言われた状況や実際にしている事を抜きに「言葉尻」を捕まえることの無意味さを痛感します。「時代」という事なのですが、言葉の迷走は続いていきそうです。

受験がはじまっています。生徒や父母の心にも余裕のなくなる頃です。成績のとれない子供をやたら精神的に追い込むと、親子関係にひびが入ります。誰もが自分を否定的にはとらえていないものです。自分なりに頑張っているとも思っているものです。

我々塾の講師も、親から成績が上がらないことを責められると、つつい子供に厳しくなります。きつい言葉を発してしまうわけです。そうすると生徒からは「死ね！」という言葉が返ってきます。怖い先生だと、そんな言葉は出ないのかもしれませんが、優しい先生なら経験があるはず。子供は自分の好きなことには熱中します。親から先行的に勉強を押し付けられ、勉強が嫌いになってしまった生徒は、強制されればされるほど心の闇を大きくしていきます。それを超える子、そうでない子で受験の明暗は分かれます。

子供はそれぞれ違うので、成功した別の子供の方法論を押し付けてしまうところが良くないのだと思うのです。ボタンの掛け違いのように、勉強と子供の心の葛藤は続きます。

「受験」にまつわるいろいろなモヤモヤを超えていくのに、個人差があるという事だと思えます。中学受験ではそれが顕著です。高校受験は、受験自体が子供の大きな変化を作ります。大学受験では、自分を対象化しきれないと流されてしまうこともあります。

「好きなことだけやって生きていけない」ことはみんなわかっているけれど、その迷う気持ちを一向に理解しない大人にも腹が立つのでしょうか。でも、「受験」は待つてはくれません。

自習室で黙々と頑張る高校生や既卒生、小学生も高校生も授業のない日でもオープンルームにあふれています。ここは、心を決めて、ごまかさず教科に向き合いませんか？不安もあると思いますが、それに振り回されず、できることを一步一步進めてほしいと思います。